

州聞此事彌以歸往、即潛載誓狀云、至于子孫對武州流、抽無貳忠、敢不可插凶害云云、其狀一通、遣鶴岡別當坊、一通爲備來榮之廢忘、加家文書云云、

〔落穂集前編三〕馬場美濃守、略中、味方の敗軍の方を打詠め罷在候處に、眞田兵部來て、山の下に馬を止、それに見へ給ふは、馬場殿にて候哉と、言葉懸る、馬場聞て、美濃にて候、貴殿には如何と答へければ、兵部聞て、兄源太左衛門義引退候と承り候故、手前も退候處に、兄が乗料の馬を牽返し候付、其口附のものに、相尋候へば、源太左衛門ははや討死仕候と申に付、今朝出勢の砌、討死を遂るに於ては、兄弟一所と申合候付、是まで引返來候、若其許には、源太左衛門討死の場をば、知給はずやと申に付、馬場申候は、源太殿討死の場と有之は、頓て柵際近き所にての事にて候、其邊へは最早上方勢入込可申候間、御越にて及間敷候、我等儀も、此處に於て討死と致覺悟罷在候間、一處に可申合との返答に任せ、兵部も馬場が側に立雙び罷在候處に、上方勢追々馳來候付、兵部、略中、討死を相遂候と也、

〔駿臺雜話四〕武田信繁

信繁信虎の愛子として、信玄を廢して、信繁をたてんとするをば、かねて信玄も知たる事なれば、必忌惡むべし、それに國にのこりて信玄につかふるは、危難の場なり、略中、信繁嫌疑の間に處ながら、信玄につかへて、兄弟の間、少しも違言ある事をきかず、略中、さて川中島にて、討死せられしこそ、尤義にあたりて覺へ侍る、信玄一生の危き折なれば、此時死せずして、いつの爲に命をおしむべき、されば主辱かしめらるれば、臣死するの義を守て、こゝろよく討死せられしは、誠に見危授命といふべし、

〔慶長見聞集四〕山梨三郎とんせいの事

世に住侘て、當年の春、江戸へ來り、一所に宿をかり、傭夫と成て、其日々々の身命を送る所に、兄云